

コロナまん延の中、感染症対策をしながら、150名もの方々が参加してくださいました。ありがとうございました。今年初めて YouTube 配信も試みましたが、ライブ配信できず申し訳ありませんでした。半日遅れですが配信されていますのでぜひご覧ください。

こちらの QR コードを読み込むと「第1部追悼式」の YouTube 配信が視聴できます。



※当日資料もこの YouTube ページからダウンロードできます。

<https://youtu.be/SZoM8Puaeig>

第一部 追悼式

11:00~12:00
会場 追悼ひろば



司会
須原志保さん

BIYP・ムンノ
リくらぶによる
「とどけ若者の
声メッセージ」

水没事故から 80 周年の今回の追悼集会に際しまして 10 代 20 代を中心とした世界の若者からメッセージを募りました。アフリカ・韓国からも含め、39 名の方からメッセージが届きました。心からお礼申し上げます。

当日は寄せられたメッセージの中から 9 つのメッセージが紹介されました。
(※当日代読されたメッセージは次ページ参照。その他は当日資料 P16~20 参照)

《メッセージを代読してくれた 3 名のメッセージ》

ぼくは日本の事をかなり平和な国だと思っていました。でも、この事故の事を知り、日本は平和ではないことに気がつきました。何故、政府は行動に移さないか疑問です。
(河村真輝 13 歳 下関市)

この事を絶対に忘れないために、次世代への縛を繋ぎたい。
(藤田優 17 歳 宇部市)

80 年前の事件が今も長生炭鉱という形で残っているのですごいと思いました。被害者の人達を忘れないためにも、私はこの事件が深く、広く伝わってほしいと思っています。
(品川百合愛 17 歳 宇部市)



韓国遺族会からの
メッセージを代読する
内岡貞雄顧問



駐広島大韓民国総領事
林始興さん



在日本大韓国民団山口県地方本部
徐鶴奎さん(左)
在日本朝鮮人総聯合会山口県本部
副委員長 李実さん(右)



最後に参加者による献花を行いました。



今年は韓国からのご遺族の参加がなかったため、駐広島大韓民国総領事、民団、総連の三者でチェサを執り行っていました。

刻む会 たより

NO. 84

2022 年 3 月 10 日

長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会 共同代表 井上洋子・木村道江

事務局 宇部市常盤町一―一九(宇部緑橋教会内) TEL 0836(21)8003

カンパ振込先 ゆうちよ銀行 口座番号 01590・7・32405

年会費 《正会員》個人 3,000 円 団体 5,000 円
《賛助会員》個人 1,000 円 団体 2,000 円

ホームページ <https://www.chouseitankou.com>
メール chouseitankou@gmail.com



当日紹介されたメッセージ

植民地化したのはヨーロッパだけだと思っていたので、日本も植民地化したことに驚きました。一番驚いたのは、まだ謝罪していないことです。本当に悲劇的で、学校でもっと教えられるべきだと思います。

(マガフ・ニャンジュラ 10 歳 コンゴ共和国)

当時の日本という国に対して、強い怒りを感じました。いつどうなるかわからない炭鉱に入って、仕事をしているのを想像したら怖くなりました。

(キム・ユシン 9 歳 下関市)

未来を生きる私たちは、これから正しい歴史を学んでいかないとはいけなし、またそういった歴史をしっかりと受け継いでいかなければと思いました。私は異国の地、日本で亡くなった朝鮮人犠牲者たちの無念を忘れません。

(ペ・キヨン 14 歳 下関市)

犠牲になった 183 人の内、70%が朝鮮人だということを知り、驚きました。山口にもこんな悲しい歴史があったことを知り、この悲劇を忘れずに生きていこうと思いました。

(パク・リセ 12 歳 下関市)

第二次世界大戦が終戦して 77 年たちます。この長生炭鉱では、戦争が終わっていません。1 日でも早く炭鉱の中から遺体が帰ってくることを祈っています。

(大井雅裕 15 歳 防府市)

戦争当時の日本はとても怖いところだと思いました。普通の海に見える場所にも、そこには多くの人々の無念の気持ちが眠っています。私たちはこの出来事を後世に正しく伝えていきます。

(リ・チハ 14 歳 下関市)

このような「痛い歴史」が遅く知られて残念だった。そして現場の保存や遺骨の回収は、韓国と日本政府が一日も早く整理してほしい。一日も早く遺骨を回収して、遺族の方々に遺骨が戻ってほしい。長生炭鉱のようなことが二度と起きないでほしいし、遺族の方々が幸せに暮らしてほしい。

(イ・ソヒョン 16 歳 韓国)

見つけられなかった遺体を探し長生炭鉱で亡くなった方々が一日も早く家族のもとに戻れることを願っていますし、これからこんなことが起こらないようにみんなで努力してもっと発展してほしいです。

(イ・ジュンホ 16 歳 韓国)

長生炭鉱のことを広げて下さっている日本の皆さんに感謝します。政府たちがしなければならなかったことを今に解決できず、市民たちが動いているのが悔しいです。しかしながら、こういう事を続けながら後世に伝えることが私たち(韓日)のやるべき事だと思います。一日でも早く海の底にいる犠牲者たちが家族のそばに行くよう祈ります。

(キム・ヒョンジ 28 歳 北九州市・ソウル市)

★BIYP 韓国富川(プチョン)青少年とのいきいき交流計画 (宇部市／荒瀬)

2013 年に始まった韓国富川(プチョン)市のゴリウル青少年文化の家 KUMA の中学生と山口県内の青少年が相互訪問交流。コロナ禍で相互訪問は中断し、現在はオンライン交流に挑戦。人間いきいき研究会／いきいきアジア交流(IKKI IKKI ASIA)が呼びかけの主体になっている。 BUCHEON IKKI IKKI ASIA YOUTH EXCHANGE PROGRAM

★ムンノリくらぶ (山口市／陶)

2020 年に、BIYP で韓国を訪問した中学生、高校生が自主グループを結成。ムンは文化でノリは遊び。月 1 回の例会では、K-POP や韓国料理、ハングル学習やオンライン交流の準備を進めている。

第 1 部と第 2 部の間の関連企画

犠牲者 183 本のろうそくキャンペーン



BIYP とムンノリくらぶが企画、準備、当日の運営を行いました。
LED のろうそくを使用し、犠牲者のお名前と出身地、享年を貼りました。

80 周年特別メッセージ



1942 年 2 月 3 日の痛ましい水没事故から本年度 80 年という長い歳月が流れました。1991 年に「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」（以下「刻む会」）が結成され、長生炭鉱の悲劇が歴史の闇から掘り起こされてから 30 年余の歳月を経て、ようやく全国の心ある市民に知られるようになってきました。

「刻む会」は発足当初から追悼碑建立を目標の一つに掲げましたが、発足から 22 年目の 2013 年に、漸くこの地に市民の手による追悼碑を建立することができました。これは全国各地の市民からの 947 件、16,860,809 円に上る募金の賜物であり、ここに改めて深く感謝を申し上げます。しかし、任意団体である「刻む会」は個人所有としてしか登記できず、固定資産税を払うことも余儀なくされ、この問題解決のために事務局をおかせていただいている（宗）日本基督教団宇部緑橋教会に所有していただき、今日に至っています。

そうして、念願の追悼碑は、この地において確かに歴史を刻むものとなり、日本全国から、また海を超え韓国からもこの「追悼ひろば」を訪れる人々は格段に増えました。

2014 年に「刻む会」はご遺族の当初からの悲願である「遺骨の収集と返還」を主たる目的に置くと共に、より民主的な運営と組織形態をめざし、総会を最高の政治機関として再出発しました。とは言え、「遺骨の収集と返還」を目標として決断するには、それなりの議論と責任、覚悟が必要でした。しかし、私たちは決断したのです。なぜなら、「遺骨の収集と返還」は、犠牲者の尊厳の回復のためには必ず成し遂げなければならない課題であり、このことを通して真の平和の実現につながるからです。そして追悼碑の建立を共に実現した人々の信義と良心を信頼したからです。

その後、今日に至る 7 年間で、会員・支援者は 500 名を超え、「追悼ひろば」は祈りと学習の場として次々に拡充し、犠牲者の名前を永久的に保存できるよう木版から石に刻み直しました。

「遺骨の収集と返還」については、検討を重ね、既に埋められてしまった坑口からのアプローチが最も有効との判断に至り、専門家による地中電気探査を実施し坑口を確定することができました。また、存命遺族 28 名（犠牲者 26 名）の DNA を取得し、将来の遺骨との対面に備えてきました。

しかし、坑口からの発掘は、付近の土地に対する行政の不作为でこの間具体的に前進できなかったことは返す返すも残念でなりません。水非常から 80 年を経て、遺族の高齢化を考えると、DNA の取得は一刻の猶予もないのですが、この点においても行政の協力は得られず、停滞を余儀なくされています。そうした中ですが、先頃、日本人犠牲者の二人の遺族が名乗り出て下さったことは、大きな喜びであり励みになりました。

私たちの求めている「遺骨の収集と返還」は、本来は加害国の責任として日本政府がすべきものです。そのことを踏まえ、日本政府と朝鮮半島のふたつの政府が共同の事業として行うことができれば、互いの真の信頼、友好が築かれるものと思います。私たちはその観点から日本政府や韓国政府とも交渉を重ねて参りましたが、政治情勢は遅々として進まず、待っていては手がかりすらおぼつかないのが現在の情勢です。

ここを突破するために、私たちは「遺骨の収集と返還」に日々ご奮闘されている全国各地の仲間の皆さんと連帯を広げ、知恵と力を結集しなければなりません。長生炭鉱には何人も否定できない「強制連行・強制労働」の歴史の事実・証言・証拠等が明白に存在していますし、ご遺骨を待ち望むご遺族の皆様が存在があります。今なお日本各地に捨て置かれてきた犠牲者の遺骨問題の解決のためにも、全国で市民運動を展開されている方々との情報共有を強め、「長生炭鉱の遺骨収集と返還」を共通の課題として捉えていただき、世論喚起を推し進めていきたいと思ひます。その力を得ながら

日本政府に対して、朝鮮半島との連携を視野に入れて粘り強く交渉してまいります。

私たち「刻む会」は、80 年というこの節目の年を、心をあらたにして確実に「遺骨の収集と返還」に歩み出す年にします。宇部市、山口県を含む地元関係者の皆様の協力を得ながら、ボーリング調査をはじめ坑口の発掘にとりかかります。追悼碑建立までに諸般の事情はあれ 22 年もの歳月を費やし、遺族の皆様を長く待たせたことを心から悔やみ、海の底に眠る犠牲者の皆様との再会が一日も早く実現できるよう、非力ではありますが、これからの一年一年を確実に目標に向かって強く歩む覚悟です。

皆様におかれては、今後とも知恵を、そして力を寄せていただき、私たちと心をひとつにして熱いご支援を賜りますよう心からお願い申し上げて、80 周年にあたってのメッセージとさせていただきます。

2022 年 2 月 12 日

長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会 共同代表 井上洋子 木村道江

第2部 遺骨収集と返還に向けてのシンポジウム

14:00~16:30

会場 ヒストリア宇部

《コーディネーター》井上洋子（「刻む会」共同代表）

《パネリスト》

上田慶司さん

「戦没者遺骨を家族の元へ」連絡会

吉柳順一さん

NPO 法人国際交流広場無窮花堂友好親善の会 理事長

殿平善彦さん

北海道一乗寺住職

森 俊英さん

遺骨奉還宗教者市民連絡会 事務局長



「第2部 シンポジウム」の様子はこちらのQRコードを読み込むとYouTubeで視聴できます。

※当日資料もダウンロードできます。
<https://youtu.be/UGPKOJBsGc4>



※紙面の都合上、実際の発言から抜粋しています。ご了承ください。

井上 今日、私たちが遺族に対して一日も早く遺骨を発掘してお返ししたいというその大事業を進めるにあたって、全国で遺骨問題と真摯に向き合ってこられた皆さんにパネラーとしてのこの場においていただきました。

皆さんに知恵と力をいただいて、共に長生炭鉱の問題を強制連行、強制労働のご遺骨の共通課題にして、一緒に歩んでいただきたいという強い願いを持ちながら、このシンポジウムを進めさせていただきます。

○パネリストの自己紹介・長生炭鉱への思い

上田 私は戦没者遺骨を家族のもとへ連絡会ということで、軍人・軍属の遺骨を家族のもとへ戻そうということで、取り組みをしております。

韓国の方から、お父さん、お兄さんの遺骨を探してほしいと、全然、どこで死んだのか連絡も来ないし、遺骨は帰ってこない。沖縄に動員された方なんかは行方不明扱いになっていて、死んだこと

にもなっていない。そんなひどい状態で、公式には30万人以上が動員されて2万2千人の方が亡くなった。沖縄の行方不明の方はカウントされていないので、もっと多くの方が亡くなって、遺骨の返還を求めているということです。そういう取り組みを始めたんですけれども、実際初めて遺骨を遺族のもとへ帰そうとすると、遺骨に名前が書いてあるわけではないし、日本人とか韓国人の人だとか書いてあるわけではないので、どうしたものかと。DNA鑑定しかないなあということで、それが十何年前の話です。その時、日本人の遺骨も

ほったらかしにされている。韓国の遺骨もほったらかしにされているんだけど、日本政府が日本人の軍人・軍属の遺骨をちゃんと家族のもとに戻さないのに、韓国人の遺骨を韓国のもとに戻すわけがないじゃないかという話がありました。だから、DNA鑑定の話が一つ。もう一つは、日本の軍人・軍属の人たちとも連帯して、遺骨を戦争の被害者として戻していこうというのが二つ目の話ですね。三つ目は、戦争の被害と言ったらニューギニアとか、フィリピン、世界各地、太平洋地域、海の中も含めてすごい大きな地域で日本が戦争を仕掛けていって、多くの方が亡くなった。現地でも多くの方が死んでいる。そういう問題を解決するには、日本政府や韓国政府を動かすような運動を作らないと無理だよということ三つの大きなテーマを10年前、遺骨のことをやろうということと始めていきました。そして、10年経ったわけですけれども、そこで大きな成果が出ております。

一つは、厚生労働省が昨年10月から（アジア太平洋地域、沖縄は先行してやっていた）アジア太平洋地域のご遺族からDNA鑑定を集めると。今、多くの遺族の方がDNA鑑定を国に提出しています。私たちは、韓国人の遺骨についてもDNA鑑定やれと折衝してきた中で、日本人がこれだけ大規模な取り組みを始めるところまで来たわけですけれども、この機に韓国の遺骨を遺族のことを無視して日本人だけ始めるのはおかしいということ、昨年9月14日に韓国人遺族11名の集団申請を厚労省に対して申請いたしました。厚労省については、門前払いするかと思いましたが、

これを受け取りまして、韓国政府と返還に向けた条件の交渉の途中なので、それが成立したら、韓国人を差別せずに行っていくつもりであると。しかし、返還条件が整っていないので、もうちょっと待ってほしいということでも門前払いをさせませんでした。それで今、最終的に厚生労働省と返還条件をめぐって交渉をはじめていくという状況になっています。

タラワ島というのがありまして、これも激戦地なんですけれども、タラワ島では、6497人のうち、日本の戦没者が4713人。このうち1200人が韓国・朝鮮から連行された若者です。これで、今までは、こういった遺骨は全てアメリカから日本に渡され、日本人として処理されてきたわけですけれども、韓国政府が、この遺骨について4人に1人、韓国人がいるぞということで、待たをかけたしまして、共同鑑定をすることになりました。で、1名が韓国人の遺族であるということが判明しました。これで、韓国に一人の遺骨が帰ることになります。驚いた厚生労働省は、韓国がまじめにやっていると、我々も真面目にやらないかんということ、タラワ島2900名に手紙を出しまして、日本人の遺骨2人が判明しました。日本とアメリカ、韓国も鑑定しています。一つの骨を3つに分けて。それで、日本人が2名、韓国人が1名、計3名の遺骨の返還の目途がたった。160くらいのご遺骨がありますので、じゃ、DNA鑑定で分らなかったご遺骨はどうするのかというところで、安定同位体というのがあります。これは、ストロンチウムの重さの分析で、どこ地域で小さいときに育ったかということが分かる。

日本でも韓国でもそういう研究が進んでいて、安定同位体比検査というのがやると、どこで小さいときに育った遺骨かが分かる検査を、韓国側も開始をするということで全遺骨の調査を始めています。日本政府の厚生労働省もこれをやると思っています。これはつまり、DNA鑑定で個人を特定して、残りの遺骨については日本と韓国に振り分けていこうということ、これを日韓の共同で確認しているという状況にあります。これは長生炭鉱にも大きな力になると思いますので、役員の方に大学の先生の資料をお渡ししておきますので、また見ていただきたいと思います。

最後に、長生炭鉱の話ですが、今日、海辺で、強制的に労働させられて帰れないと、お母さんにお手紙を送って、何としても逃げて帰りたいんだとのお手紙がありました。これは募集ということで、私は日本製鉄、新日鉄の強制労働の問題もずっとやってきましたけれども、募集で、いいところあるよ、すごく金儲かるということで連れてこられた、行った瞬間に、大阪の製鉄所に行った瞬間に、警察が来て、絶対に逃がさないぞと：お前たちの親の居場所を全部知っているんだと：もしも逃げたら、お前たちの親がどうなるかわかっているなということで、1週間に1回警察がやってきて脅迫をすると：そんなことで全く逃げられない状態がある、これが、今、解決しなければならぬ、日本が犯してきた過ちというものを見なければならぬ、国会で、総理大臣になろうと立候補した人がこういった問題について、佐渡金山でそういった問題を省くんだということを言っている：こんなひどい状態に日本はなっ

ていますけれども、この長生炭鉱の皆さんが本気で遺骨発掘をやるということで、私たちもここに来まして。本当に協力してやっていきたい。こういった強制労働の歴史について、遺骨という真実をみながら、遺骨



の叫びを聞いて、遺族の叫びを聞いて、この日本の負の部分の歴史も含めて日本人が解決していかなければ、日本と韓国の皆さんと連帯して、ご遺族のご遺骨を発掘するというところに踏み出すという地域の皆さんの決意に私も全力で応援して頑張っていきたいと思います。

吉柳

私たち無窮花堂は福岡県飯塚市にあります。飯塚市というのは筑豊炭鉱の真ん中です。たくさんの方が、朝鮮半島から募集や徴用、いろんな形で炭鉱に連れてこられた。そんな中で、炭鉱の中から脱出した人が5割か6割いる。例えば、朝鮮半島から3万人連れてきても1万5千人は逃げる。そんな過酷な状況の中で、労働させられるという実態がありまして、いたるところに遺骨が散在しているという状況でありました。そういった実態の中で、私も、本当にこの地域で亡くなった、野ざらしにされた朝鮮半島出身の遺骨、それを収集するというのを始めました。

私は今理事長をしています、2代目であり、初代は在日1世。本人も2回も強制連行され



ています。1回目は佐賀県の川南造船所というところに入れました。そこで働いていたんですけれども、実は、お父さんが危篤という連絡が来ました。そこで

「帰してくれ」と言

ったが、帰してくれなかったということで、脱走して故郷へ帰った。そうして帰ったところが、残念ながら父親は亡くなっていたと聞いています。そんな中で、家族で小さいながらも片寄せ合って生活していくと決めたために、帰ってきて11日目に命令が下った。警察が来て、また九州に行け、筑豊に行けということで、本人たちは本当に嫌がったんですけど、お前が行かなかったら家族が生活できないようにするという圧力をかけてきたそうです。それで、飯塚市の隣に宮田という町があるのですが、その炭鉱に働きに参りました。そして、彼はより過酷な労働をさせられ、そこも脱走をしております。そして、戦後、1945年の終戦を迎える。その間、転々と捕まらないうちにあってこっち行って、最後は大刀洗という飛行場の工事現場で働いたと聞いております。その後、飯塚に来て、とんちゃん屋（牛や豚の内臓を売る仕事）を始めて、ずっと生きておりました。私たちの活動を始めるきっかけは、彼が70歳前に大病を患って入院し、その時に病床で、あの時一緒に働いた同胞はどうしたんだろうか、生きてるんやろうか、死んでいるんやろうか、ひ

よっとしてちゃんと国に帰ったんやろうか、どうしたんだろうかという思いが廻ったということでした。その当時、彼の親しくしていたお寺の住職と話をして、それはちゃんとせんといかんということ、彼は70歳を超えた歳、1994年頃から筑豊地域の寺院をずっと回って、朝鮮半島から連れてこられた遺骨収集、遺骨の実態調査をしました。そしてお寺と掛け合いながら、やはり同胞の遺骨があちこちに散在している状況がわかって、集めてみんな追悼しようじゃないかということ、1996年に在日コリアンの納骨追悼碑を作ろうと活動を立ち上げました。それからどこに建てるか、どのようにするかということで議論しました。この遺骨がある原因の一つは国、行政の責任が大きいと、行政に協力してもらう。また、筑豊地域はたくさんさんの炭鉱企業がありましたので、炭鉱企業にも協力してもらおうという立場で活動を始めました。飯塚市と何回も何回も交渉し、4年かかりました。2000年12月に無窮花堂をみんなの力で立ち上げました。在日コリアンを含めて、日本人、労働組合や宗教者団体、いろいろな人たちの協力を受けて無窮花堂というのを建立しました。

私どもの「無窮花の会」の活動の4つの柱というのがあります。一つは追悼堂を建立して両民族は年に一度犠牲者を追悼するとともに、日韓・日朝の親善に寄与すること。これは納骨堂を立てるということですね。二つ目は、在日コリアン同胞が日本国民と共存共栄し、未来永劫にわたる共存を構築する。みなさんご承知の通り、在日コリアンのみなさんはもう4世、5世の世代です。

ずっと日本で暮らしています。日本でしか生活できません。そういう意味で、未来永劫共存していくということの一つの柱にいたしました。3つ目は、過去の歴史をきちんと反省し、二度と過ちを繰り返さないように歴史を正しく伝えていくこと。これはいろいろな講演会や、先ほどの裴来善（ペ・レソン）さんの体験談も含めて、学校に訪問して報告すること、もうやってまいりました。4つ目は、無縁仏を収集し、供養、住所氏名等、出身が分かれば、遺族のもとへ還すということであります。

今までに170体の遺骨をお寺からお預かりしました。そのうち3体、家族・遺族のもとへ還すことができました。2001年は娘さんに、2003年は甥御さん、2017年には息子さんに、遺骨を還すことができました。戦後数十年経つ中で、なかなか遺族を見つけないというのは難しい状況になってきていますけれども、本籍の分かっている遺族につきましては、現地を訪問して、面役場に行って調べてもらう、そういった活動をずっとやってまいりました。一応3つの遺骨を還すことができました。2015年に北海道から115体の遺骨を韓国に戻されました。そのことをきっかけに、今一度、僕たちの活動の原点に立ってご遺骨は戻さないかん。遺骨は故郷に還りたい、という思いがあるし、家族は、ぜひ手元にいたいという思いがあるということで、私どももやるということを決めました。私どもも分かっている範囲で現地に行き、調査をしました。新たに遺骨を還すめども立ったが、国家間の問題で遺骨を還す目途が立っていないということもあります。

長生炭鉱への思いですけれども、あのカーブを曲がって、ぽっと出てくるあの2本のピーヤ。この下に亡くなった方が眠っていると感じた時、本当に胸が痛むというか、締め付けられる。先ほどの上田さんの話でもありましたけれども、一刻も早く海底から引き揚げて、お日様のもとに戻し、そして家族に戻すということ、それは急ぐと思っております。これからも私ども「水非常を歴史に刻む会」と共にがんばって参りたいとそういう風に思っています。

殿平

遺骨を掘るということは、私は単にものとしての遺骨を掘っているだけではないということ。を最近改めて強く感じさせていただいています。私たちは遺骨を掘るといことは、失われた命を掘ることであって、その命をせめて今からでも可能な限り取り戻したいという強い思いを持って、「遺族の思いを自らの思いに何とか近づけさせていただいて、遺骨発掘ということを考えなければならない」と思ってきました。私が遺骨問題に出会ったのは1976年ですから、既にもう50



年近い歴史を経験しているわけですが、依然として、強制連行強制労働で犠牲になった方たちの遺骨問題というのは、日韓政府間はもちろんのこと、私どもの努力の少なさもあって、依然として全く未解決な問題が引き続いていると言わ

なければなりません。その最も代表的な、今私たち共同でそれを考えなければならぬのが、まさに長生炭鉱の犠牲になられた朝鮮人犠牲者のご遺骨でありましょう。私たちは朱鞠内で遺骨発掘の後、遺骨の展示などを行っている展示館などを作ってまいりましたけれども、それらが倒壊して、今改めて、全国的な募金の中で再建運動を続けております。私は改めてここで皆様に申し上げます。長生炭鉱で犠牲になった朝鮮人犠牲者のご遺骨を海底から発掘するというのは、単なる遺族の願いを実現するというのではなくて、私たち日本人が戦争と植民地支配の中で生み続けてきた東アジアへの犠牲の、その深い命の闇を越えていこうとする私たち自身のために、やはり遺骨は発掘されなければならない。このように思っております。そしてそれは、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」の方々の努力に待つものだけでもないのです。これは、戦争と植民地支配を経験してしまった日本人全体がその遺骨のために努力を払う責任があると、私はそのように思います。実際に遺骨を掘るためには、一つは具体的手立てが必要でしょう。それを発掘するためには、その責任が、根本的に日本政府とそれからその犠牲を強いた企業にあることは間違いがありません。ですから私たちは日本政府や企業にきちっとそのことを実現するよう、強く求める責任もまたあります。しかし、その政府や企業に発掘を必ずやるようにと強く要求することだけで、この運動をとどめることはできないでしょう。現実問題として、政府や企業が、長生炭鉱の遺骨を具体的に掘るといふ現実的な展望はほとんどないと言っている

でしょう。私はやはり、宗教者市民が、この問題に正面から取り組む必要があると考えています。それは、全国的な課題であります。日本の責任として、日本国籍を持つ者の責任として私たちも企業や政府と共に自らの責任を自覚するべきではないでしょうか。具体的にはどのような遺骨の発掘が可能なのか。技術的な問題が一つあるでしょう。さらに、多くの財政的負担を考えなければならぬでしょう。私たちは、技術的問題は専門家、あるいはこの後、遺骨奉還宗教者市民連絡会の森事務局長が具体的な提案をしてくださるのではないかと私は思っていますけれども、その提案も含めていろいろな可能性を具体的に追及していく必要があります。しかし、同時に財政的基盤も必ず全国的な基盤の中で築く必要があります。私たちも今、崩壊、倒壊し、あるいは焼失してしまった、北海道の朱鞠内における「笹の墓標展示館」というものの再建を目指して、6千万円というお金の目標を設定して皆様に募金をお願いしている最中です。あまりにも大きなお金だと私たちは思っていますけれども、必要なものはやはり市民運動は自らの力を鍛えてそれを調達することを私たち市民運動自身の目標に据えるべきではないでしょうか。今まで私たちは市民運動というものは身銭を切ってお互いに金を出し合っただけで、ボランティアの活動であって、それでお金を作るなどということを考えるべきではないと思ってきました。私はもうそういう時代を終わらせる時代だと思っています。市民運動自身が主体的で具体的な力を持つ必要があるのです。政府に要求し、頼んでいる、あるいは企業に要求し、

頼んでいるというだけでは我々の運動を育てていくことはできないでしょう。彼らの責任をきちっと明らかにし、責任を実現することを強く求めながら、しかし同時に私たち自身の主体的な力に身に着ける必要がある。必要なお金については、具体的な目標を設定してそしてみんなに募金を中心から訴えるべきであります。私たちはそういう力を市民運動が身に着けること。私は韓国との市民運動との交流もありますけれども、韓国の市民運動ってね、自らのそういう力を持っておりまして、韓国にはある意味で日本とは違った寄付文化があるといってもいいでしょう。われわれはそういう意味では、日本における市民運動の寄付文化を変革させていく責任があるといってもいいと思います。その大きな力を具体的に示すその活動の一つが、僕は、今長生炭鉱が具体的にみなさんに訴えてくださる活動を通してそういう募金もまた考える必要があるのではないか、様々な形で皆さんに呼びかけを行って、募金を集めてもいいのではないのでしょうか。私たちは朱鞠内の募金を集めるにあたって、呼びかけ人という人々を、250人余りの人たちにお願いをしました。まだたくさんの方に参加していただける可能性もあるでしょう。長生炭鉱もまたそういう全国的な方たちの応援を呼びかけ、そしてその人たちに、有名、無名の方々の力に依存して具体的な必要な資金調達の準備をするべきではないでしょうか。そのような具体的な努力を実現するために、私たちは、お互いの知恵と力を出し合っていきたい。北海道から私たち自身の課題を抱えながらですが、長生炭鉱が必ず海底から遺骨を回収す

るのだという具体的な目標を設定して訴えてくださるのなら、私はそのために、私のみならず、全国で多くの人たちがそれに応えてくださるはずだ。それは日本人の責任であると同時に、私たちの新しい具体的な自己完結的な自分たち自身のための活動をするという市民運動の新たな展開の動きにつながっているはずだ。そのように思います。せっかくお招きいただきながら、こちらに伺うことができないまま、北海道の我が家からえらい話をいたしましたけれども、ぜひそういう決意を私の中でも述べさせていただいて、皆様と一緒に議論に参加させていただきたいと思っています。

森

今紹介いただきました遺骨奉還宗教者市民連絡会事務局の森と申します。その事務局は、私とキムヒョンテさんの二人でしてまして、全国

の、各地の遺骨の問題にかかわっている方々なぐ役目をしております。今から4年前にできた連絡会です。私は浄土宗の僧侶で大阪の浄土宗寺院の住職でもあります。長生炭鉱への思いというのを文章にして載せていただいていますけれども、少し読んでいきます。「日本各地には奉還すべき遺骨が多くあります。寺院・教会などの主教施設に安置されている遺骨、地中に埋没している遺骨もあります。遺族が判明している遺骨、遺族が判明する可能性がある遺骨、その可能性が見いだせない遺骨もあります。また、日本政府（厚生労働省の）管理下にある遺骨…この日本政府の管理下にある遺骨というのは、例えば、長崎県の吉岐の天徳寺にある遺骨、それから、東京の祐天寺に安

置されている遺骨などを指します。いずれの遺骨も一日も早く奉還されなければいけません。そうした、それぞれの遺骨がおかれている立場の多様性を考えるにおいて、海底から収集されるのを待つ長生炭鉱の遺骨も急ぎ収集されるべきであります。そして遺族が判明している場合もあるわけですから、遺族への返還が可能です。これは、長生炭鉱のご関係においては非常に特徴でもあると思います。もちろんすべてが分かっているわけではありませんが、また、遺族が分からなくても、遺骨は祖国の地に奉還されることが大切です。事故現場が海底でありますから、収集が簡単でないことは承知しています。しかし、現在の技術によれば、決して不可能だとは思えません。」本当に、市民がロケットに乗って宇宙旅行をする時代ですから、そこまで進んでいるその技術、もちろん日本は技術高いですから、長生炭鉱の海底の遺骨を掘り出せないことは絶対ないと私は考えています。ぜひ収集すべきだ、掘り起こすべきだということ、それはそういうことをしていく、考えていく、またいろいろな方と話し合っていく中で、いろいろとこの長生炭鉱のことが人に知られていくんだと思います。人に知られていく、また掘ろうとする、現実化していく、また人に知られていく、それは相乗的に広まっていくものなのだと私は思っています。その一例をお



話して、この最初の「挨拶を終わりにしていこう」と思うのですけれども、今日のこのシンポジウムのお話があって、私、いろいろ調べてみたんです。国土地理院に日本のいろいろな詳しい写真があって、空中写真が保管されています。国土地理院の本部はつくば市にあるんですけども、そこに写真のデータが全てあって、我々は家庭のパソコンでも見ることが出来ます。この県のこの位置のこの部分と言ったら、出てくる。ただ、それは400dpiといって、画素が荒いんです。つくばに行けば、1200dpiといって非常に詳しいものが見れますし、全国に国土地理院の支所みたいなものがあるんですけども、大阪にもあります。大阪の府庁に大阪の支所みたいなものがあるって、私行ってパソコンで見ていたんですね。山口県の床波の辺りの地図を一生懸命、その1200dpiというのを一生懸命見せてもらっていたんですけども、そして、その職員さんが横に座って、機械と一緒に操作してくださいさるんです。その職員さんが、お坊さんが一生懸命山口県の地図を見ているから、不思議に思って、「何見ているんですか？」って話になって、「実は1942年にこれこれこういうことがあって」という話をして、「ああそうですか」という話がありました。その地図は何年かおきに、1947年くらい、1960年代、1970年代、ずーっとおんなじ所を取っている資料がいっぱいあるんですけども、もう一回そこに行って見てたら、またその人、横に座って、一緒に画面を見てくれていたんです。「こもつと引き延ばしてください、拡大してください」「って言うたら、その職員さんが、「あ！

これピーヤですね！」って言ったんですね。「ピーヤってよくご存じですね」と聞いたら、「いや、実はあの後、私パソコンで長生炭鉱のこと調べたんです」って言うてくれて、それで私その人とすごく仲良くなりまして、その国土地理院の職員さんだから、公務員さんの立場だと思うんですけども、長生炭鉱のことを電話でいろいろ話をしようと思ったら収集できますかねえとか、そんな話になりまして、やっぱり地質学に詳しい方ですから、「うーん、これはどうかなあ」とか、「災害救助の大学の研究室にあたるべきかな」とかいろんな話をしてくれました。山口県に住んでおられるも、長生炭鉱のことをご存じない方も多いでしょうし、大阪に住んでいたら、まずご存じないですから、だけでも、収集するんだと、歴史を学ぶんだということをする人が、動いていると、徐々にそういう輪が広がっていくんだと思います。具体的にどうして収集すべきか、これが今後の話になっていくと思いますけれども、それはまた時間を与えていただきましたら、お話をさせていただきますと思います。

井上

遺骨の発掘という壮大な事業の前には私たちには大きな壁があると思っています。一つは坑口付近の土地の問題です。それは、私たち「刻む会」が真摯に向き合って解決する課題であるんですけども、二つ目には、今、森さんが言われたように、どうやったら発掘できるのかという技術の問題。そして3番目には、具体的に発掘するための資金をどういうふうに調達していくのか。そういう問題と、並行して政府の交渉等やって

いかなければならないという課題が残っていると思います。

〇パネリストから課題についての助言

上田

遺骨の問題というのは誰が責任を負うのかという厚生労働省。それを監視するのが、それを監視するのが厚生労働委員会ですよね。厚生労働委員会というのは参議院・衆議院両方あって、あと、外務省、外務委員会（外務・防衛委員会）ですかね、そういうのもあると思うんですけども、結局、国を動かす行政機関を監視する国会議員の現場で議論を作っていくということで、厚生労働委員会のメンバー全員、その国会議員の秘書さんに当たっていききました。国会議員に直接言うのは難しい、秘書さんから当たるんです。そして、そういう議員さんが現れてきて、国会で継続して論争してくれることによって、政策が変わっていくんです。厚生労働省の。これは自民党も含めて、あの人の言っていること正しいじゃないかということ、厚生労働省の言っていることはおかしいぞと思わせるような議論を日本の行政機関を監視するところで行っていくというのを本格的にやっていたらいいと思います。それは、あきらめずにがんばること。市民運動と、政府を動かすのとハイブリッド。厚生労働省を監督する国会議員の厚生労働委員会、全員の秘書さんに当たっていく、取り組みをするような起爆剤となるような運動を市民団体が作って、全国に訴えていくということですが、大事なと思います。



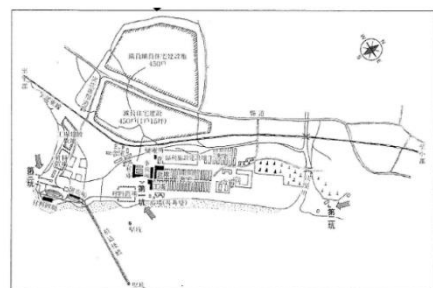
手洗いに使われ、非常に臭かったとか、汚かったとかいう資料も読ませていただきました。これがピーヤですね。これが沖のピーヤで、これが近い方のピーヤ。ここから空気を出したり、水をポンプで外に出したりしていたようです。ここが落盤事故のあったところ。ここが1キロくらいあって、実際には、働いていた人はここよりもっとこっちと

森 (資料を見ながら) これが私先ほど少しお話しした国土地理院から買った床波地区の航空写真です。1962年、1200dpi(画素)というんですけれども、我々が入手できる中では一番鮮明な写真です。この写真

いっぱい見ながら考えてきたんですけれども、これが第一坑口ですね。後に第二坑も掘られて、これが本坑。トロッコというか滑車…線路みたいなものがある太い方の本坑。その横にちょっと細い…ここには10メートルから20メートルの間があるんですけれども、ここから入って行って、ここに何個も行き来できる道があって、ここは主にお



(1962年 国土地理院撮影 1200dpi)

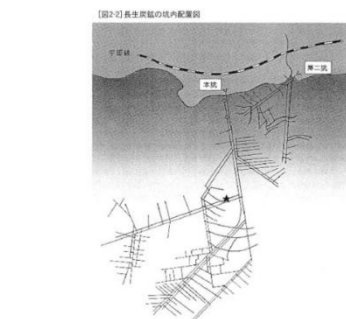


出典) 宇部市立図書館土資料部所蔵「長生炭鉱 坑内図」(1946年4月1日現在)により作成。

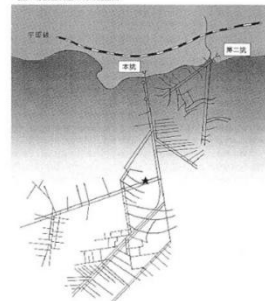
(前掲図書 36ページより)

ここに社宅があって、だいたい今までの資料を重ねて、こういう見方で間違いがないのではないかと。そういうことから、今の、現在の現場でも海岸の道路があって、その内側の草むらの木が生えているところがありますけれども、ここがおそらく坑口跡

かこっちでも仕事をされていたでしょうから、事故の時の様子というのは資料を読ませていただくのと本当に驚くべき証言でつづられています。で、この辺にいた人は、一気に逃げてきてですね、坑口から出れた人もあっただろうし、この辺で倒れて亡くなら



『図2-2 長生炭鉱の坑内配置図』



『日本の長生炭鉱 水没事故に関する真相調査』より (37ページ)

2015年12月25日発行

責任編集 許光茂

出典) 宇部市立図書館土資料部所蔵「長生炭鉱 坑内図」(1946年4月1日現在)により作成。

だろうと。埋められて、今何もないんですけれども、多分ここを掘れば、坑口が出てきて、坑道が見えるだろうと思われます。長生炭鉱の第一坑口、我々が今一番注目しているその第一坑口の写真が見つかったというふうなんです。80年前のその写真が見つかったというふうなのは、私、非常に不可解でしてね、絶対どこかにあるだろうと思うのですが、今言われているのは、同規模の坑口、このくらい大きな坑口、大きなアーチ形で、長生炭鉱の場合は、この上に2つ、送風機、でっかい扇風機があったらしいです。すなわち、ここから空気を中に送りこんで、当然どこから出さなければいけませんから、ピーヤから出していたということだと、私は読みました。ですから、これが今、つぶされて、埋まっている、これが15度くらいの角度で下にまっすぐ下がって行って、やがて平行になって、ずーっと沖に向かって坑道が走っていくという構造であったようです。ですからここを開けて、当然重機が入って、ある程度埋まっている部分を掘り出して、数メートル掘ったら、空間があって、そして、しばらく行くと多分、海水面のところには海水が入っているだろうと思われんですが、言うたら80年間一切光も空気も入らなかった、そういうところを我々が絶対に関けるべきだと私は考えています。そこで、具体的な話なんですけれども、これは私が素人的に本当にこっぴどいことかなあと思っている調べたものですから、全く違う方



長生炭鉱と同規模の坑口
本山炭鉱第1坑 (昭和15年)

『図説 一 有徳から無徳へ』68ページより
平成10年3月発行
編集: 松野孝典編集
発行: 宇部市



法があるのかもしれない。だけれども私のにわかなアイディアとして読んでいただくありがたいです。これROVという機械なんですけれども、要するに水中の調査とか、これいろいろなものを挟んで持って帰ってくる、そういう遠隔操作ができる機械があります。これはキャ



に売っているものではないし、そんな金額で買えるものではないですと言われました。他には、水中ドローンというものも活用されているそうです。これは小型の水中ドローンで、これは大きさを言ったら、例えば、家の前に置いてあるゴミバケツありますよね、青い。あーいう、ゴミバケツに入る

ような大きさもあるとおっしゃっていました。そういう意味ではピーヤから入れることもできると思うんですけども。これはもっと深いところでした。しっかりした機械でいろいろな調査をする、海中の中を調べる機械だそうです。私ちょっと簡単にいうてまいすけれども、こういう機械を持っているサルベージ会社の担当者とも電

水中ドローン



(ある会社のホームページより)

話で話したんですけども、サルベージ会社というのは非常に大きな会社です。まず、担当者は大事なことだとは言ってくれるんですけども、上の方に会議に上げたらまず無理やろうなあと、答えが返ってきました。というのは、こんなこと：長生炭鉱の場合ですとね、坑口開けて、そこに機械を入れて、もしくはピーヤから機械を入れて、ご遺骨、ご遺品を出す、そんなことまずやったことない。水は濁っている可能性が高い。そういう意味からでもできるかできないかわからないことには、大きな会社ほど、まずやりましようとは言わない。お金はもちろん払うんですけども。非常に難しい問題があるということも分かっています。ただ、どっかの会社が受けてくれる可能性もあると私は思っています。過去の調査事例、これはここにおられる方でも関わった方もあると思うのですけれども、ウベニチという新聞記事（1997年2月3日付）がありまして、2月1日に調査をしたとあるんですね。長生炭鉱、ピーヤ内から木片回収。水非常の会、遺物は韓国の遺

族へ。海面下27メートル地点に坑道。こういう題の記事があつてですね、この記事の終盤にはこうありました。調査結果によると（ピーヤ）二本のうち、海岸から五百メートル沖にある（沖の）ピーヤは、直径4.15メートル、海面から突き出た部分は高さ3メートル。海面下25メートル地点に坑道がある。とみられたが、鉄分を含んだ濁水で視界がきかなかったこと、途中突起物があり危険なため、それ以上の潜水を断念した。要するに潜水夫がそこまで入ってくれたということです。このピーヤと海底数メートルの深さにある坑道でつながっている、要するに、ピーヤとピーヤはつながっている。さっき言ったトイレにも使われた細い汚い、臭い道です。ね：つながっている四百メートル手前のピーヤは、直径2.8メートル。そのピーヤから進入しての潜水調査では海面下27メートルに坑道を確認。ということとは、ここまで潜水夫が入ったということ。55年たった今もつづいておらず、スギの丸太でできた支柱などが見えたという。こういう調査をして、水は濁っていたけれども、そこまでは行ってくれて、木片とかですね、実際に、土も：坑道の土も回収されて、韓国の遺族に渡されたという報道がありました。ということは、坑口からのアプローチという方法とピーヤからの

○ 過去の調査事例

『日刊 ウベニチ』 1997年2月3日付け 9面 (現在の宇部日報社)

「長生炭鉱 ピーヤ内から木片回収
水非常の会 遺物は韓国の遺族へ 海面下27メートル地点に坑道」

【この記事の終盤には、下記の記載あり】

調査結果によると、二本のうち、海岸から五百メートル沖にあるピーヤは、直径4.15メートル、海面から突き出た部分は高さ3メートル。海面下25メートル地点に坑道がある。と見られたが、鉄分を含んだ濁水で視界がきかなかったことや、途中突起物があり危険なため、それ以上の潜水を断念した。

このピーヤと海底数メートルの深さにある坑道でつながっている四百メートル手前のピーヤは、直径2.8メートル。ピーヤから進入しての潜水調査では海面下27メートルに坑道を確認。五十五年たった今もつづいておらず、スギの丸太でできた支柱などが見えたという。

アプローチ両方考えられる。もしくは全く違う方法が考えられるのかもしれない。いずれにせよ、人間が中に入っていくというのは非常に危険で、二次災害になるとそれこそ大変ですから、機械を入れて遠隔操作でということになるでしょうけれども、そんなイメージから、私はいろいろな人と話をして、こういう暫定的なアイディアの報告をさせていただいた次第です。非常に難しいことだと思っています。だけど、出せるんじゃないかと。また、出そうと努力することが新たな道を生んでいくと私は思っています。80年間、空気も光も入らなかった世界ですから、せめて、坑口を開けてですね、中がどうなっているのか、1キロ先まで探しに行かないとご遺骨、ご遺体がないとは限らないですね。いろいろな資料を今まで読ませていただいたら、案外、斜めの15度で下がっていきまっすくの坑道、その下がツボ下というそうですけれども、そこから平行になる。そこまでの間でお一人でも二人でもご遺骨、ご遺品を引き出せる可能性があると私は思っています。やってみないと分からない。だけど、やらずに難しいことだからといって、置いておくことではないと私は思います。

吉柳

今問題なのは、民間徴用者この方の遺骨返還というものが遅々として進まない。軍人・軍属は一部韓国に還った例があります。だけれども民間徴用者はですね、遺族のもとに還ったというのはほとんどない。私が住んでいる飯塚というところ、麻生という方がおられます。ずっと副大臣をされました。多分山口には安倍さんという人

がおられたと思いますけれども、2014年、安倍さんが返り咲いて1、2年経った頃ですかね、全国的にこの追悼碑に対する攻撃がかかってまいりました。皆様ご存じかと思いますが、群馬県の群馬の森、天理市とか、そういったところに、群馬の森は強制連行を書いたのはないんですけども、その主催者が強制連行という言葉を使ったとかで、群馬の森の使用許可を取り消すとかいうことになっております。天理市については、強制連行という文字があったもので、撤去させられたという状況で、2014年から私どもにも攻撃がかかってまいりました。産経新聞でたたかれまして、当時飯塚市の市議会には日本会議という保守グループの議員が5、6人おりまして、その議員が毎回私たち無窮花について攻撃し、碑文を撤去しろ、書き換えろ、無窮花堂をなくせということとをずっとやってきたという経過がありました。2016年だったかな、10月にはこれに右翼の皆さんが加勢に來まして、飯塚市など23台の右翼の車がどんどんと走り、そういった状況の中で闘いを続けてきております。先ほど言いましたように、9回連続して市議会であちの無窮花堂をやり玉に挙げられました。行政はだいたい右往左往右往左往しております。私も無窮花堂は飯塚霊園という墓地の中に立っていますので、土地等は飯塚市が造成して提供してくれました。永代供養料は、あそこは納骨堂ですから、払ってくれということで払いました。ですから、あそこは無窮花の会として永久に使える権利を持っているんです。実はあそこに無窮花堂を立てるとき、飯塚市と協定書を結びました。飯塚市もこの地域

には強制的に連れてこられた強制的に働かされた人がたくさんいたということを認めて、行政としても責任の一端があるという覚書を取り交わしました。私どもは行政に対しては真摯な対応をしていこうとで、無窮花堂の追悼碑についても一字一句行政と打ち合わせして作りました。17枚の歴史パネルもありますけれども、この歴史パネルの説明版も一字一句行政としてまいりました。そういった意味では、日本会議含めて、いろいろな攻撃が降ってきていますけれども、少なくとも行政手続き上もおそらくは間違った対応をしてないというところははっきり言えるところであります。ついでもう一つ、2014年からこういった攻撃がかかってまいりまして、さっきの軍人・軍属の問題も含めてありましたけれども、民間徴用者は非常に厳しい。実は私どもではないんですけれども、小倉に永生園（ヨンセウォン）というキリスト教会の納骨堂があります。その中にも85体の遺骨がありました。私も事前調査で分かりましたので、その教会と打ち合わせしながら、身元調査やって遺骨還そうやないかと、昨年13体の本籍地の分かった遺骨を、在日駐福岡総領事館を通じて向こうの行政安全部、支援財団、支援団そういうところに調査依頼をかけた。実は13あった遺骨の7遺骨については、遺族がおるといことが分かったんです。そのうち4遺族は結局強制動員されて行方不明になっていると被害届を出した弔慰金を申請している遺族だといことが分かりました。それでその遺族に遺骨の引き取りの意思があるかということを確認してくれということをやったところ、2つの

遺族が遺骨を引き取るということを確認したとの連絡がありました。ところが、最終的に遺骨返還については止まっています。どういふことかという、日本と韓国との関係です。韓国政府は2012年の安倍政権になった後、非常に日韓関係悪くなった。ですからなおさら、この遺骨を還すには日本政府の謝罪を韓国にしろと、そうしないと受け取らないと言ってきたんです。私たちは、遺骨の問題は人道的な問題だということと遺骨を引き取る、引き取りたいと遺族が言えば戻すべきだと言っていました。福岡の韓国領事館も同意して、そんなこと言っても人道的な問題じゃないかと掛け合ってもらったんですけれども、向こうの行政安全部も支援財団も政府が決めた以上、自分たちの方では進まないというような状況になっています。そういった意味で、日韓・日朝の関係が、遺骨返還一つ一つに大きな影を落としているというのが実態だと思っています。長生炭鉱の遺骨については、韓国に遺族会がある。遺族会と日本の「刻む会」と手を合わせれば、政府を動かさなくもない。どう世論喚起していくか、みんなにどうこの問題に対して目を向けていただくか、ということが大きな力になっていくと思います。現状においては非常に難しい課題がたくさんあります。ただどそれを解決していくのは、一人一人の活動だと思っています。先ほど森さんがおっしゃったような、具体的な技術的にできるとすれば、それができる資金をみんなが集めようじゃないかと、頑張ろうじゃないかというのが一番大事だと思えます。最後に一言だけ、遺骨は故郷に帰りたい、故郷の地に眠りたい、遺族は私たちの手元に帰って

きてほしいという思いはある。私はそれに応える義務がある。というふうに思っています。

殿平

市民運動もそれぞれの活動の歴史というものがありまして、上田さんやあるいは具志堅さん達が遺骨を発掘し、遺族に還す活動を続けてこられたけれども、政府が具体的に動くような状況を市民の中で活動の中で作っていくという、そういう具体的な努力、大いに感心をしているところです。長生炭鉱の場合も、上田さん達の知恵をうまく活用して世論を作っていく、あるいは国会の中で具体的な課題になるような状況を作っていく努力が非常に大事。市民運動って、もちろんできる活動の限界はあるんですね。国家や企業がでることと我々ができることの間に大きな差があることも事実です。我々の主体的な力量を高めることによって、具体的に提起していく。政府の政治と市民の政治と私は一つあるといつも思っている。政府や企業の責任を明らかにして、それを実現させていく努力と同時に、市民のイニシアチブがきちっと発揮されて、主体的努力で問題解決への方向が動いていく。長生炭鉱の課題を実現する上で、両方の実現を図っていくべきではないか。そういう努力をきちっとやっていくべきではないかというふうに感じております。韓国との連携が非常に重要。

〇会場からの意見

・私も遺骨を探している遺族。先日12月20日に厚労省にDNA検体を提出した。今のところ、厚

労省も前向きに本当に国の責任として取り組みると言っている。この遺骨はものじゃない。この遺骨にも人権がある。だからちゃんと日本政府の責任として完結をしてくださいたいお願いした。ただ、いつ止めてしまうか、いつか誰かがまた圧力をかけるかわからない。そういう危機はあるので、私たち市民はそういうところにも目くばせをしてきちんと日本政府が責任を取るような方向に持っていくことが大事かなと思っている。

・私は在日朝鮮人2世。20年以上前山口先生に案内してもらって、ピーヤを初めて見て、その時の非常に恐怖感を覚えている。追悼祭は今回初めて参加。非常に違和感。一番核心的なところをずらしちゃいけない。権威に頼っちゃダメ。私自身の頭では、山口先生をはじめとして刻む会の方々が地域の方々を説得したり、調査をしたりとかいうそういう草の

根的なところから、作り上げてきた運動であって、それを作ってきて、協力してきて、その人たちが中心になって語り継いで、それを受けた人間がまたつむいでいく、そういう運動になるべきだと確信



しているし、そういうつもりで来た。その人たちの心があるからこそ、韓国の遺族会も私のような在日朝鮮人も心を一つにしたいなあとと思う。韓国の市民運動団体は、国家を見ながら、みなさんを見ている。日本国家は嫌い、私もそう。日本国家は嫌いでも、尊敬できる日本人がたくさんいることを知っている。そこに希望を見出さないと。そのためにお金も集めないといけない。

・祐天寺の慰霊祭には何回も参加をしていて、かなりの遺骨が遺族に還されたんですけれども、共和国の遺骨の皆さんは入国もできないでそこが多く残っている。統一的に市民団体が厚労省に国の事業として遺骨収集をやるということを位置づけさせないとだめだと思う。大変なお金がかかるので国が金を出してくれないとできない。個別で交渉する部分とそれから全国の市民団体や遺族会の皆さんが統一交渉をやって国に責め上げると二つのやり方があるのかなと思う。

・東京の新大久保にあります高麗博物館のボランティア関係者7人で伺った。現地の方たち、慰霊をされている方たちに、直接お会いすることで戦後もう本当に生存者の方たちに遭うこともない私たちが少しでも自分に引き寄せられる機会を作りたいと思って伺った。今日は伺ってよかった。（※高麗博物館ボランティアグループの方々は、翌日フィールドワークを行いました。その詳細については次号で掲載します）

○会場からの意見を受けて

森 遺骨を収集するには高額なお金の予算になると思うが、日本政府が出てくれるのが一番いいが難しい。トップを走っていくのはやっぱり市民団体だと思う。市民団体だけで集まってしまうということも起こりうると思う。話を3つに分けてほしい。1番はどのように技術的に掘り出すか。一番いい方法だということが見えたら、今度は予算。私は案外、500万とかそういった金額でまず第一歩を踏めるんじゃないかと思っている。3番目に口を掘るとしたら、掘る権利というものがある。誰の持ち主かという問題。だけど、1番と2番が固まっていけば、その権利についても迫っていけると思う。

上田 軍人・軍属は2016年に国の法律ができて、遺骨を家族に還するのが国の責務であるという初めて法律で明記されたので、2016年からは法律で国の責務。家族に還すまでが。我々もそれ以前から、法律制定以前から動いているが、それを押して、韓国人の遺骨についても集団申請もしているし、沖縄の遺骨で、170名のDNAを韓国政府が取って交渉している。それは拒否する理由もない。遺骨の話は日韓条約と関係ない。ここは民間の話なので、そこは法律もないので、かなりそこは差があるので、政府を動かしていきたいと思うが、先ほど殿平さん言ったように、市民団体が形を作って、先行してすごく大きな運動を作って、その力を持って政府も参加させていくという感じが理想的ではないのかなと私は思っている。そういう意味ではハイブリッドだが、両方

いっぺんではなくて市民運動がやはり財政的なところ、技術的なところ、権利の問題、これを解決するような提案を具体的に示して、国会議員もマスコミもそれならやれるという順番がいいんじゃないかと思っている。もう一つ言いたいのは、権利のことで、あそこを買ったらどうかと思う。入口。それだけの価値のある取り組みだと思う。お金かかるかもわからないが、本当に世界遺産とか言っているが、こここそ世界文化遺産にして、みんなで歴史的に保存して、ちゃんと掘ってやるくらいの価値があるところだと思う。

井上 2時間近くこの問題について話し合いをしてまいりましたけれども、私たち市民も主体的な力量をまず高めなければならぬ。やはり「刻む会」の会員を増やし、そして加盟して下さる団体、こういう運動を闘っておられる皆さんにぜひ入っていただいて、まずは「刻む会」の体力を大きくしたいと考えていますので、ぜひみなさんの支援をお願いしたいと思います。今日明らかになつたように、遺骨発掘に向けてはやはり技術的、あるいは金銭的、資金的な大きな課題を、長生炭鉱を全国の共通の課題にしていくことによってやっていかなければいけない。ぜひ長生炭鉱の遺骨発掘のためのプロジェクトを「刻む会」とは別に、専門的なプロジェクトチームを遺骨発掘のために立ち上げていくと、いう方向性ができたいと思っていますので、今後、「刻む会」の運営委員会では一生懸命議論し、一歩前に出る力を作っていきたいと思えます。

（閉会）

会計報告（2021/12/1～2022/1/31）

【一般会計】

（円）

	科 目	年度予算	期間実績	累計	達成率	備考
	歳入					
1	会費	600,000	40,000	521,000	86.8%	
2	寄付金	860,000	169,300	510,800	59.4%	※
3	物販	15,000	3,600	10,800	72.0%	
	証言・資料集	10,000	2,800	10,500	105.0%	
	その他	5,000	800	300	6.0%	
4	雑収入	4,000	0	3,740	93.5%	
5	前期繰越金	150,000	0	150,000	100.0%	
6	特別会計より繰入	0	0	0		
	合 計	1,629,000	212,900	1,196,340	73.4%	

	歳出					
1	事務費	50,000	7,610	27,626	55.3%	
2	広報費	370,000	83,384	349,397	94.4%	会報誌送料・印刷他
3	会議費	66,000	0	0	0.0%	
4	追悼碑管理費	10,000	812	4,798	48.0%	電気代
5	活動費	900,000	0	31,635	3.5%	
	学習会等	100,000	0	4,940	4.9%	
	追悼集会	600,000	0	0	0.0%	
	その他活動	200,000	0	26,695	13.3%	
6	他団体会費等	50,000	5,000	20,000	40.0%	
7	雑支出	50,000	558	7,874	15.7%	
	手数料	40,000	558	3,111	7.8%	郵便局
	その他	10,000	0	4,763	47.6%	
8	予備費	98,000		0	0.0%	
9	特別会計へ繰出	35,000	0	0	0.0%	
	小 計	1,629,000	97,364	441,330	27.1%	
10	繰越金	0	115,536	755,010		
	合 計	1,629,000	212,900	1,196,340	73.4%	

※寄付者（敬称略）

赤間 至 浅野 直人 有久 園子 李 和 蓮 内山 賢次 呉 世 憲 岡田千枝子
 岡屋 義之 落合紀久子 鎌田 清 亀山 英雄 小暮 房子 小林 晃 小林 昇
 斉藤美代子 島村真知子 鈴木 忠実 高橋 信 玉木 節子 崔 玉 任 崔 正 剛
 寺尾 光身 鳥家 治彦 中村 証二 南波 秀夫 野口 道彦 馬場 彰子 福田富美子
 藤本 統久 本田 竹邦 馬嶋 英子 宮田 幸好 山内小夜子 山根 努 山本 利明
 ア太平和交流協会 医療生活協同組合健文会 在日本大韓民国民団 中央本部 その他匿名14件

【追悼碑特別会計】

収入			支出		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
繰越金	588,289		追悼文修繕	169,400	
繰入金	0		繰越金	418,889	
合 計	588,289		合 計	588,289	

【遺骨収集等特別会計】

収入			支出		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
繰越金	1,706,004				
繰入金	0		繰越金	1,706,004	
合 計	1,706,004		合 計	1,706,004	

以上感謝をもってご報告いたします。引き続きのご支援をお願い申し上げます。

※なお、追悼集会の会計報告は次号で行います。

活動日誌(前回たより以降) 太字は記事掲載

- 1/7(金) 『たより No.83』 発送作業(宇部市)
- 1/12(水) 山口朝鮮初中級学校補助金カットに対する抗議座り込み行動及び座談会参加(山口市)
- 1/13(木) 第11回運営委員会(宇部市)
- 1/15(土) NHK事前取材(宇部市)
- 1/23(日) パネラーとの打ち合わせ会(Web)
- (日韓青少年交流) B-IYP・ムンリく(山口市)
- 1/28(金) 地元へのチラシ配布・草刈り(宇部市)
- 1/29(土) 真相究明ネットワーク連続講座③(Web)
- 2/2(火・水) 韓国聯合ニュース取材(宇部市)
- 2/3(水) 水没事故80周年(宇部市)
- ムンリく(山口市) シュニア会議(Web)
- 2/10(木) 追悼集会事前準備(宇部市)
- 2/11(金) 韓国 KBS テレビ取材(宇部市)
- 2/12(土) 80周年追悼集会(宇部市)
- 2/13(日) 高麗博物館ボランティアグループ W(宇部市)
- 2/17(木) 朝鮮学校支援全国行動月間行動(下関)
- (日韓青少年交流) B-IYP 日韓スタッフミーティング(Web)
- 2/24(木) 第12回運営委員会(宇部市)
- 2/26(土) (日韓青少年交流) B-IYP・ムンリく(山口市)
- 2/27(日) 真相究明ネットワーク特別講座(Web)

強制動員 zoom 講座のススメ

「刻む会」の加盟団体である「真相究明ネットワーク」主催で、オンライン講座が開催されています。コロナ禍でなかなか集まませんが、代わりにオンラインで気軽に参加できます。既に 4 回開催されており、全国から毎回 100 名近く参加しています。内容は非常にアカデミックで、勉強になります。大学での講義を聞いているようです。その道のプロの話が、無料で聞けるチャンス！事前申し込みが必要ですので、参加希望の方は、QR コードを読み込んで申し込みフォームからの申し込みの上、ご参加ください。

これから予定されている講座

QRコード



第4回 2022年3月20日(土) 15~17時
「北海道・朱鞠内での強制労働と遺骨発掘・送還」
講師：ドゥロー・アーゴさん
(広島市立大学国際学部客員研究員)

参加申し込み URL <https://forms.gle/JVh38mbEmKvnJ5FV8>

80周年追悼集会パネリストの殿平善彦さんが長年 関わって来られた活動のお話です！

第5回 2022年5月14日(土) 15~17時
「朝鮮人強制労働の否定 加藤康子と明治産業革命遺産展示」
講師：ニコライ・コンセンさん
(ロンドン大学、東洋・アフリカ研究大学院 博士課程在学)

参加申し込み URL <https://forms.gle/gKNtiNZbXg36Ljq3A>

QRコード



今後の予定

- 2022年3月9日(水) 11:40~
山口朝鮮初中級学校補助金カットに対する抗議座り込み行動及び座談会(山口市)
- 2022年3月24日(木) 10:30~13:00
第13回運営委員会(宇部市)
- 2022年3月20日(日) 15:00~17:00
強制動員 zoom 講座④(web)
- 2022年3月25日(金) 19:00~
真相究明ネットワーク事務局会議(web)
- 2022年4月14日(木) 10:30~13:00
第1回運営委員会(宇部市)
- 2022年4月13日(水) 11:40~
山口朝鮮初中級学校補助金カットに対する抗議座り込み行動及び座談会(山口市)
- 2022年5月14日(日) 15:00~17:00
強制動員 zoom 講座⑤(web)

2022年5月28日(土)
第9回定期総会

※会員には総会前に別途案内を送付します。

《同封物》
・振替用紙

今年の追悼集会は、多数のマスコミが取材に来ました。インターネット検索すると朝日新聞、毎日新聞、西日本新聞、日本海新聞、京都新聞、東京新聞、静岡新聞、web 東奥など多数出てきました。テレビ放映も地元テレビ局、テレビ山口(TYS)、山口放送(KRY)、NHK とニュース報道がなされ、NHK は2度に分けて放送しました。また、事故のあった日には韓国・聯合ニュース、追悼集会の前日からは韓国 KBS テレビが取材をし、ニュース放送しました。

事務局より

会員動静(2022年2月20日現在)

正会員 130名(総会比±0名)
賛助会員 266名(総会比-2名)
寄付者 111名(総会比+8名)
計 507名(総会比+6名)

会員・寄付者募集中！知人・友人にぜひ一歩お願いします！